『人文学報』第110号（2017年７月）
（京都大学人文科学研究所）

メンフィス英雄神話

―― リアル・ロックンローラー，文化的オブセッション，歴史的ナラティヴ内部の元型的モティーフ ――

エドマンド・ウォーレン・ペリー・Jr.*
（立木康介 訳）

パーソナリティ信仰

エルヴィスについての問いは，いつも「なぜ？」であるように思われます。エルヴィスのファンがたんなるファン以上の何ものかであるという見解を受け入れるのを，私はためらってきましたが，年月がたつにつれ，必ずしもエルヴィスのファンではなく，むしろ学者や詩人やアーティストといった人々がエルヴィスを持ち上げるのを目にするようになりました。作家たちは文学的正典（カノン）内部のよい席をエルヴィスに与えてきたし，ハリウッドはあいかわらずエルヴィス神話を不滅のものにする映画を撮り続けています。

エルヴィスは最初の身近なエンターテイナーのひとりでした ―― 身近な，というのは，ようするに田舎者（プロヴァンシャル）という意味であり，雑種犬の血統に属し，己の雑種性にまみれながら，その雑種性のゆえに愛された，ということです。エルヴィスはたまたま，オクターヴを二つまたぐ声を出せるイカした雑種犬だったのです。エルヴィスが自分の創造したロック世代の不義に屈したという事実によって，エルヴィスへの愛情を掻きたてられる人もいれば，エルヴィスが神話化されると考える人もいます。そうした愛情とそうした逆説に挟まれたどこかの地点に，神話的エルヴィスへと発展していった男の核があります。その意味でエルヴィスは宗教的な人物に似ています。人々はエルヴィスについて自分の気に入っているところや不思議に思っていることから出発し，自分が持ち帰りたいものを作り上げるのです。

さて，以上を説明の枕とするのも悪くないかもしれません。しかし次のことも忘れてはなりません。トム・パーカー大佐 ―― この人物は大佐でもなければトム・パーカーでもなかったわけですが（「大佐」はある種の尊称であり，彼の本名はアンドレアス・コルネリス・ファン・カウクで

---

*Edmund Warren Perry Jr.　Assistant Director, Art Museum of the University of Memphis

した）―― は，どこでも自分の望む大学でマーケティングの特別講座を受けもつことができたにちがいない〔ほどマーケティングに長けていた〕，ということです。カーネル・トムを陣地の一角に置いてこそ，エルヴィスの名はアメリカ大衆の面前に留まったのです。エルヴィスの死後，グレイスランドとエルヴィスの遺産の管理者たちは，エルヴィスのイメージが至るところに存在し続けるように手を尽くしてきました。つまるところ，グレイスランドは営利事業なのです。こうしたパーソナリティ信仰のゆえに，エルヴィスは未来にまで転居し，私たちのポップ・カルチャーの一参照点として姿を現し続けるでしょう。

おもしろいことに，私たちのミッションは，歴史，アート，哲学，および批評といった分野の建造物を用いて，エルヴィス・プレスリーをアカデミックに把握することに存するというのに，もしここにエルヴィスがいたとしたら，これほど単純な男にそんなに込み入った見立てをするなんて，と言って笑いとばすでしょう。のちほど触れるように，学者や，詩人や，ゴールド・レコードを生み出したいと願ったことのある誰もが問う最大公約数的な問いは，「なぜエルヴィスなのか？」です。2003 年にペンギン伝記叢書からエルヴィス正典（カノン）に寄与する著作を発表した学者ボビー・アン・メイスンは，2010 年 3 月，ある質問に答えて，この問いを次のように措定し直しました ――

> シリーズの編集者ジェイムズ・アトラスが私にエルヴィスの伝記的エッセイを書くように求めてきた理由は，私にはエルヴィスとの地域的親和性があるということでした。そうでなければ，私がそんな本を書くことなどけっしてなかったにちがいありませんが，いざこの主題に取りかかってみると，私にはそれがつかめたように感じられました。
>
> これは嬉しいことではありませんでした。私には〔…〕エルヴィスの友人たちが，そして彼のことをほんの僅かにしか知らなかった人たちでさえ，エルヴィスが彼らの人生になってしまっているがゆえに回想録を書かずにはいられなかったように見えるのです。これらの人の多くは，「プロのエルヴィス友人」として人生を送り続けました。（これに加えてなりきり人（インパーソネイター）たちがいるわけですが，それはまた別の話です。）しかし私の考えでは，エルヴィスはあまりにカリスマ的だったがために（このカリスマ性の大部分は彼の名声によって彼のうちに築かれたものです），彼の友人たちは命がけで彼にしがみついてしまったのです。いうまでもなく，彼らはみなことあるごとに自分のエルヴィス物語を繰りかえし，やがて自分の本を書くことが避けられなくなってしまうのです。
>
> そうした一群の本のなかで最も純度の高い一冊として際立っていたのは，ジューン・フアニコの著作です。彼女がそれを自分の手で，つまりゴースト・ライターを使わずに書いたという事実には，意味があります。しかも彼女はそれを何年も先延ばしにしたのです。彼女が生きたのはエルヴィスの人生ではありません。実際，エルヴィスの人生を生きるこ

とを，彼女は拒絶したのです。彼女がようやくこの著作を書いたのは，おそらく，それが諸々の記憶の断片をつなぎ合わせるひとつのやり方であり，彼女はそれらをつなぎ合わせて，彼女が知っていた若き日の，無垢なエルヴィスを蘇らせようとしたのです。彼女には，注目を集めたいという気持ちはありませんでした。（私もインタヴューを申し出ましたが，そういうのはもうたくさんだからと，とても感じよく断られました。）ピーター・ギュラルニックも，彼が書いたエルヴィスの伝記のなかで，彼女の誠実さに敬意を表しています。彼女の物語はとても印象に残りましたが，それは，本のなかでも述べたように，エルヴィスがもったおそらく最後の純真な，ふつうの関係だったからです。

〔…〕私はエルヴィスの観点からエルヴィスを理解しようと努めたと，自分では考えることにしていますが，ほとんどの人は自分自身の観点からエルヴィスを捉えています――つまり，彼の音楽のこと，彼がいかに人々の人生を変えたか，彼がどのように文化に貢献したか，彼がいかに等身大以上の存在であったか，といったことを。エルヴィスの観点からみれば，それはとても奇妙で，彼は呆気にとられていたにちがいありません。だから彼は問い続けたのです，「いったいなぜオレがエルヴィスになるのに選ばれたんだ？」と[1]。

私たちの多くが，すばらしいアート作品を目にし，古い詩句が唱われるにつれて，響き合うものを経験します。そして私たちは心動かされます。オペラ，絵画，映画，舞踊――人々の心を動かすのは，自らの技を極めた匠たちです。エルヴィスの技は歌と踊り，そしてエンターテイニングでしたが，それらに秀でた匠としてのエルヴィスの貢献は，彼の作品によってかつて心を動かされたことがある人々，そしていまも心動かされ続けている人々の数によって計られるのです。

著名人として人気を博するというのは，どちらかといえば束の間のできごとであり，大半の著名人は僅かなあいだ突発的にスポットライトを浴びることができれば御の字であるのにたいし，エルヴィスの死後のキャリアに伴う反響は，毎年増える一方で，けっして衰えたことがありません。独立以来，アメリカは各世紀にひとりのメタアイコンを生み出してきました。ジョージ・ワシントンは18世紀のアイコンであり，エイブラハム・リンカンは19世紀のアイコンでした。とくれば，エルヴィスは20世紀のアイコンにほかなりません。エルヴィスのレコードはいまでも百万枚単位で売れ，最近でも，死後25周年に当たる2002年に，エルヴィスの1968年のナンバー「おしゃべりはやめて」〔原題：A Little Less Conversation〕のジャンキーXLによるリミックスが，ポップ・チャートの第1位を獲得しました。エルヴィスはさまざまな映画で話題にされ（『スコーピオン』〔原題：*3000 Miles to Graceland*（デミアン・リヒテンスタイン監督）〕，『プレスリー対ミイラ男』〔原題：*Bubba Ho-Tep*（ドン・コスカレリ監督）〕），小説で参照され

(〔ウイリアム・マックレイナー・ヘンダースン著〕『完全にイッてるエルヴィス〔Stark Raving Elvis〕』や，ダニエル・クラインの殺人ミステリー・シリーズ『キル・ミー・テンダー〔Kill Me Tender〕』，『ブルー・スウェード・クルーズ〔Blue Suede Clues〕』)，世界のポピュラー文化にコンスタントに顔を出しています。日本の総理大臣，小泉純一郎（彼の誕生日はエルヴィスと同じ1月8日です）は，2006年6月にジョージ・ブッシュ大統領とグレイスランドを訪問し，世界的なニュースになりました。

エルヴィスのイメージは，今日，彼のキャリアの絶頂期と比べてもなお認知度が上がっており，世界的にみても，エルヴィスの顔はおそらく他のいかなる歴史上のアメリカ人よりも容易に認識されるでしょう。世界的にメジャーな宗教的人物に帰される肖像画の類を除けば，エルヴィスの顔が人類史全体のなかで最も認知度の高い人間のイメージである，ということになってもおかしくありません。エルヴィスの人気の異例さは，エルヴィスの名声の「いかに」と「なぜ」，そして，21世紀に入っても変わらぬ彼のイメージの増殖の秘密を，私たちが吟味するよう促さずにはおきません。

エルヴィスと書かれたことば

はじめのうち，エルヴィスの物語は雑誌や報道で語られ，そうした記事に伴う写真のおかげで，彼のイメージは至るところで目に入るようになりました。エルヴィス・プレスリーは1935年1月8日の生まれです。大恐慌のせいでアメリカが荒廃しきっている時代でした。エルヴィスの両親，ヴァーノンとグラディスは，ミシシッピー州テューペロウの最貧困層に属しており，ヴァーノン・プレスリーはなかなか安定した勤めを維持できませんでした。グラディス・プレスリーは息子に過保護になる傾向があり，1938年，ヴァーノンが強盗の罪でパーチマン刑務所に送られると，母子の絆は自然と強められました。ヴァーノン・プレスリーは翌年の初めに釈放されましたが，プレスリー家はテューペロウでほとんどチャンスに恵まれなかったため，1948年，メンフィスに引っ越します。ヴァーノンはメンフィスで定職に就くことができました。そしてエルヴィスは，1949年からヒュームズ・ハイスクールに通い，1953年に卒業します。エルヴィスはそれまでにもたえず音楽 —— ブルース，カントリー，とりわけゴスペル —— に積極的な関心を寄せていましたが，メンフィスで成人するころには，ラジオ，教会，そしてビール通りのライヴ・ミュージック・シーンがこの経験を後押ししました。1956年にエルヴィスがRCA〔アメリカ・ラジオ会社 Radio Corporation of America〕と契約すると，アルフレッド・ワートハイマーが同社に雇われ，この若きエンターテイナーの写真をまずニューヨークで，次いで彼の故郷メンフィスで，撮影します。これらの写真はいまや国宝です —— エルヴィス・プレスリーをとり囲むヴィジュアル・カルチャーの潮流の最初の波であり，この潮流は彼のキャリアの最初期からけっして途絶えることがありませんでした。はじめのうちは，

小さな伝記やコミック，そしてもちろん新聞や雑誌に休みなく掲載される記事の数々，レコード評や映画評，それから山のような他の出版物が主流でした。エルヴィスの生前には，中身の濃い書き物が書棚に並ぶことはほとんどありませんでしたが，1977 年 8 月 16 日に彼が急逝すると，いっさいが急速に展開してゆくことになります。エルヴィスの死後数時間のあいだに，彼の写真はあらゆる形態のメディアを駆け巡りました。ショックの波はエルヴィスのファンを襲っただけでなく，呆然とする大衆をも襲い，人々はまもなく，貧困から富裕へ，無名から著名へ，さらには名声からアイコンへと旅した，このミシシッピー州テューペロウ出身の若者に共感を覚えるようになりました。エルヴィスはその日に世を去りましたが，世界のほうはエルヴィスを手放そうとしませんでした。彼のレガシーはこのときようやく築かれはじめたのです。

エルヴィス没後の魅惑はまず，共感的な伝記およびそれほど共感的でない伝記という形で露わになり，それが書棚に並びはじめました。エルヴィスの名を呼び出す印刷物の正典目録（カノン）は年を追うごとに充実してきましたが，最早期のマテリアルの一部には山のような数の回想録が含まれており，それが克服すべき困難になります。回想録及び暴露本（テルオール）は，ここでは，エルヴィスに関係した人々の手で書かれた個人的なストーリーと定義され，それが書かれたのは ——

1. 注目を集めるため
2. エルヴィスを中傷もしくは弁護するため
3. 金儲けのため

という三つの理由からでした。とりわけ，1977 年の暴露本『エルヴィス ―― 何が起きたのか？』は，好色な類書の口火を切り，しかもエルヴィスの死のほんの数週間前に出版されました。エルヴィスのもとから解雇された三人の男たちによって，いわゆる「聞き書き（アズ・トールド・トゥ）」形式で（大半の回想録と同様に）書かれた本作は，やりすぎにならない程度に明確なことばで，エルヴィスがクスリを使用していることや，彼の情事，空手と銃に彼が注ぐ情熱，そして彼が怖れている物事を記しています。この著作以後，多くの回想録はエルヴィスの公的イメージを修復する意図で書かれたと断定して差し支えありませんが，そのうちの多くは必ずしも経験を解明するためにではなく，むしろそれを利用して一儲けするために書かれたのです。それは今日でも続いています。こうした本の多くは書き方が雑で，エルヴィスが亡くなったほとんど直後に出版されはじめました。ナース，メイド，兵役仲間，ボディガード，親類縁者，そして友人たちがこぞって，エルヴィスについて大衆がもつ，無意味ではあっても内密な知識を増大させる行為に荷担してきたのです。エルヴィス宅の住み込みナースだったマリアン・J・コックのことばを拾ってみましょう ——

> 私たちはただ，様子を見に行ったり，コーヒーを飲んだり，それからテレビでフットボールを観たりして，静かな晩を過ごしました。フットボールの試合が終わると，彼はよくラ

ケット・ボールをしに出かけ，それから映画を観に行ったものだけれど，私のほうはベッドに入るだけでした。エルヴィスは，夜中に家を出て行くときには必ず，まず私の部屋に寄っておやすみと言ってくれました[2)]。

エルヴィスのメイドだったナンシー・ルークスが挙げている別の例によると ――

エルヴィスはとても熱い性分だったので，周囲にあるものは何でもできるだけ冷やしておきたいと思っていました。窓に取り付けるタイプのエアコンを自分のベッドのすぐそばに置き，冷気がじかに体の上を吹き抜けるのを感じられるようにしてみたり〔…〕。以前は，屋敷の反対側の角のドレッシング・ルームに二台目のエアコンがありました。屋敷のなかのツアーがオープンする前に，取り外されてしまいましたけれど[3)]。

これらの回想録のなかには，しかし，興味深い問いに答えてくれるもの，エルヴィスが極端な行動に走ったという神話や噂を個人的な視点から解き明かしてくれるものもあります。もちろん，エルヴィスの妻以上に深い親密さをもつ視点から書けた人がいたとは思えません。五年間エルヴィスと生活を共にした妻，プリシラ・ボーリュー・プレスリーの回想録『エルヴィスと私』は，追ってグリール・マーカスが私たちに示してくれるように，エルヴィスのパーソナリティについて比較的僅かな洞察しかもたらしませんが，そこから次の一節を引いておきましょう ――

あの人はね，あの人がいうところの「テクニックばかりで感情というものをぜんぜん持ち合わせていない」歌手に我慢がならなかったの。その種類の歌手だとあの人が断固みなしていたのが，メル・トーメとロバート・グーレだった。この二人のせいで，二台のテレビが 357 マグナムで吹き飛ばされたのよ[4)]。

他の回想録，とりわけジェリー・シリングの『僕とエルヴィスという名のあ(ガ)いつ(イ)』とジョージ・クラインの『エルヴィス 僕の最高の友』は，より公平な目で書かれており，敬愛と共感が込められています。シリングとクラインはともに 20 年以上にわたってエルヴィスと固く結ばれていました。やがて，この二つの回想録は，他の多くの，もっと疑わしい動機で書かれた回想録と比べて，より優れた歴史叙述であるとみなされるようになるでしょう。この二つの著作はまた，チャック・クリサファリというジャーナリストの磨き抜かれた文章の恩恵を受けてもいます。

ジェリー・シリングによって記録された伝説的瞬間のひとつは，1965 年，エルヴィスがベ

ル・エアに借りた自宅での，ビートルズとの対面でした ——

〔…〕ビートルズは8月のある夜，10時ごろにふらりとやってきたんだ。キャリアの点では，ビートルズは当時，ゲームの頂点にいた —— 数々のナンバー・ワン・レコードを出し，彼らの映画にたいする批評家たちの激賞はやまず，ソールド・アウトしたどのコンサートでも会場は狂ったような賑わいだった。だが彼らは，エルヴィスと対面していることをほんとうに喜んでいるみたいだったし，その晩のノリを決めるのをエルヴィスに任せようとしていた〔…〕。偉大な才能が顔を揃えたこの対面が，ものすごいジャム・セッションとか，ニュースになるような乱痴気パーティとかに突入していたなら，歴史としてはもっとおもしろかったかもしれない。だが実際には，家での集まりの多くと同じ，静かでイージーゴーイングな雰囲気だった。つまり —— あんな面子が揃ったにしてはまあ静かでイージーゴーイングだったってことさ。なにしろエルヴィス，ビートルズ，パーカー大佐，ブライアン・エプスタイン，それから大佐提供の二，三のルーレット・ホイールが，一つの部屋に集まったんだからね〔…〕。はじめにお互いを紹介し合うあいだは，ちょっとぎこちなかったが，ようやく全員が腰を下ろすと落ち着いたよ。するとエルヴィスが「おまえらがその辺に腰かけて，オレをじっと見ているだけなら，オレはベッドに行くぜ」とビートルズに声をかけながら，氷を砕いたんだ。エルヴィスも一座もようやく笑った。ビートルズはいよいよ，自分たちの相手にしている人物が彼らの斜に構えたユーモアのセンスを共有していることに気づいて，みんな打ち解けられたよ。エルヴィスがフェンダーのベースを取り出し，レコードに合わせて演奏するなんて一コマもあって，ポール・マッカートニーがしきりに感心していた〔…〕。それから，エルヴィスはジョン・レノンの空気を読まない放言には明らかに気分を害したけれど，彼らはお互いにピーター・セラーズの映画を気に入っていて，そのことを語り合ったりもした。〔…〕ぼくはリンゴとビリヤードをし，ビートルズのツアー・マネージャー，マル・エヴァンズとビリー・スミス〔エルヴィスの従弟〕の組と勝負したんだ（ぼくたちが勝ったよ）[5]。

もちろん，アメリカ史上に残る皮肉（アイロニック）な，アイコン的（アイコニック）瞬間としては，エルヴィス・アーロン・プレスリーとリチャード・M・ニクソン大統領の面会に勝るものはまずありません。この面会がいかに多くの点でミスマッチなものであったかは，驚くほどです。クール対冷淡（コールド）。ルーズ対堅物。出たとこ勝負対計算ずく。ペンテコステ派対クウェイカー。グレイスランド対ホワイトハウス。ヴェルヴェットとヴェガス対政治（ポリティクス）と資産所有（プロパティ）。エルヴィスとニクソン。

故大統領の補佐官だったイージル・「バド」・クローは，この記念碑的邂逅についてこう記しています ——「〔1970年12月21日〕午後12時30分。エルヴィスと私はルーズヴェルト・ルー

ムを抜け，ホールを横切って，オーヴァル・オフィス〔大統領執務室〕の北西ドアまで歩いた」[6]。これはおそらく，アメリカで書かれた伝記すべてのうち，最も興味深い文のひとつです。エルヴィスがホワイトハウスを訪問した目的は，大統領から連邦麻薬取締官のバッジをもらうことでした。クローは続けてこう書いています ——

> ニクソン大統領は，われわれが部屋に入ると椅子から立ち上がり，デスクの正面に回ってエルヴィスと対面した。大統領は，ラペルにアメリカ国旗のついたグレーのスーツを着ていた。ホワイトハウスの写真担当官オリー・アトキンスは，二人が歩み寄るやいなや写真を撮りはじめた。〔…〕すると，大統領が会話の口火を切った。「ミスター・プレスリー，お目にかかれて嬉しいです。麻薬の問題についてわれわれに手を貸してくれるというあなたのお申し出に感謝します。」〔…〕数秒の気まずい沈黙のあと，エルヴィスは言った。「ミスター・プレジデント，私に会ってくださってありがとう。私の家族の写真と私のバッジをいくつかお目にかけたいのですが。」そう言うと，彼はぴょんと跳ねて大統領のデスクの前に立ち，彼のバッジと写真を広げてみせた。大統領は彼の横に立った[7]。

クローは，エルヴィスとニクソン大統領の会話について，エルヴィスは「つとめて大統領が同意してくれそうなことを言おうとしていた」[8] と述べています。エルヴィスはたいてい崇拝される対象とみなされ，スピリチュアルな意味でいう以外には，いかなる種類の懇願者とみなされることもまれであるだけに，この記述には惹きつけられます。とはいえ，エルヴィスの愛国心は疑う余地がなく，クローの記録によれば，エルヴィスは大統領にこう告げたといいます ——「私はテネシーから来た貧乏少年にすぎません。私はこの国からたくさんのものをもらいました。だから，自分がいままでにもらった分を返すために何かしたいのです」[9]。この大胆さが功を奏し，エルヴィスのホワイトハウス訪問は，合衆国司法省麻薬中毒者・危険薬物局のバッジをもたらしました。ホワイトハウスのカフェテリアでエルヴィスと昼食をとった自らの経験を見事に要約して，クローは「スリリングで愉しく，シリアスでちょっと厄介だった」[10] と述べています。

こうした回想録の留まるところを知らぬ増殖ぶりは，それらがピンからキリまであり，文章の質や洞察のレベルがさまざまに異なっているにもかかわらず，文化の殿堂（パンテオン）におけるエルヴィス・プレスリーの位置を開示する最初の指標になります。アメリカのポピュラー・カルチャー・シーンにエルヴィスが蔓延する理由は，主には，これらの作品がよく売れることです。もっとも，エルヴィスの死後徐々に浮上してきた文学におけるエルヴィスには，他にもいくつかの文脈が存在してはいます。

エルヴィスが伝記的著作の対象になった初期の作品と時を同じくして，エルヴィスは創造的

文学，すなわち詩，小説，音楽，および映画にも姿を見せるようになります。エルヴィスの最初の伝記的映画は，1979 年初頭に封切られた『ザ・シンガー』〔原題：*Elvis: The Movie*（ジョン・カーペンター監督）〕でした。後年，長く印象に残る『ミステリー・トレイン』〔原題：*Mystery Train*（ジム・ジャームッシュ監督）〕（1989）や，陰謀説を採る〔エルヴィスは死んでいなかったという設定をもつ〕『プレスリー対ミイラ男』（2002）は，ダークで怪奇的なエルヴィス像を打ち出しました。日記や日誌，さらにはグレイスランドの正面に立つ壁に書き込まれた，エルヴィスにかんする詩の数は，おそらく何百万にものぼるでしょう。作中人物として小説や映画に登場するエルヴィスは，彼自身の役を演じることもあれば，エルヴィスなりきり人（インパーソネイター）を演じることもあり，後者の場合，肖像権者が自分で自分をアイコン化しているのだといえます。

ウィリアム・マックレイナー・ヘンダースンはエルヴィス小説の草分けのひとりです。1987 年の彼の小説『完全にイッてるエルヴィス』は，エルヴィスの死後まもなくエルヴィスなりきり人（インパーソネイター）の仲間入りをし，エルヴィスの座に就こうとする，バイロン・「ブルー・スエード」・ブラフォードというひとりの男を描いた，衝撃的で挑発的なストーリーです。イメージの横取りとイメージの拡充が創造の受け入れ可能な係数とみなされるポストモダン世界において，バイロン・ブラフォードが新たなキング・オヴ・ロックになろうと望むこと，いや，より的確には，エルヴィスのパフォーマンスの玉座を相続しようと望むことは，じゅうぶん自然なことであるように思われます。「この町にはひとつの穴が空いている。むかしはエルヴィスがそこにいたが，今度はぼくがそれを埋める番なんだ」と，バイロンはタレント事務所のオーナーに告げます。「ぼくはこう言ってるんです。聴衆の前でぼくが歌うのを見てくれ，そしてそのあと，キングがもう死んであの世に行ってしまったのか，それとも生きてラスベガスにいるのかを，あなた自身で決めてくれ，と！」[11] バイロンが自らのエルヴィス体験をとおして辿るオディッセイには，銃の撃ち合いや薬物，そして女たちがつきまといます。バイロンがその自己実現回路を完結させるのは，残念ながら，彼が暴動の火付け役になり，コンテストで優勝した記念のエルヴィス・ジャンプスーツを自分で脱いで，ついには文字どおりの意味で裸になり，ラスベガス警察の手のなかで比喩的な意味で生まれ変わるに至るときなのです。

『完全にイッてるエルヴィス』の出版から 20 年以上経ってから，私はヘンダースンに以下の二つの質問をしてみました。1）これから 10 年後，小説や映画のなかのエルヴィスはどこにいるでしょうか？ 2）なぜエルヴィスは小説と映画のどちらにとってもこれほど大きな題材なのでしょうか？ 2010 年 3 月，彼から e メールで届いた回答にはこうあります ――

> 私が思うに，われわれはメディアにおけるエルヴィスの長生きぶり，いまも続いている寿命に，少しは驚いてみるべきです。これが近々終わることになるとは，とても思えません。エルヴィスという元型は，世界中に住む人々の広範な一群に巨大な引力を及ぼしてい

ます。それが変わるとも思えない。メディアのおかげで，複合的元型としてのエルヴィスはメディアの命が尽きるまで生きながらえるでしょう。エルヴィスの引力そのものは，あるエルヴィスなりきり人（インパーソネイター）がかつて私に告げたことばで説明できます ——「彼は完全なパッケージなんだ」と。世界神話のどれほど多くの相をエルヴィスが結合しているかを考えると，このことばでも控えめすぎるといいたくなるほどです。これらの相をいちいち挙げてみようとは思いませんが，奇跡的な誕生にはじまって，〔死後の〕変貌や再生で話を終えるまで，そのあいだを埋めるのにまる一晩語り明かしてもおかしくありません。その人に含まれるペルソナや元型的性質，それに宗教的性質までも数に入れれば，これほど長い一覧，何マイルにも及びそうな一覧ができあがる有名人を，私はほかに知りません。実際問題のレベルでいえば，彼の莫大な魅力（アピール）があるなら，エルヴィスがいつまで熱狂的に人を惹きつけられるかは，メディアを動かしている連中にかかってくる —— つまり，これからの諸世代に向けてエルヴィスを再創発し続ける上で，彼らがどれだけ創意に満ち，機略に富んでいるかにかかってくると思います。エルヴィスが亡くなってすいぶん時間がたつわけだから，そこは物書きや映画作家や音楽プロデューサーの腕の見せどころ，ということです —— しかし彼らがやるべきことはまちがいなくたくさんあります。

最初の質問にお答えしつつ，私は二番目の質問にも答えたように思います。しかし，二，三の考えが浮かびます。エルヴィスは男にも女にも等しくアピールします —— といっても，おそらく女性のほうがこのアピールに，より開けっぴろげな反応を見せる傾向がありますが。男たちはエルヴィスを仲間とみなす，つまり，一緒にスポーツをしたり，クルーズしたりするやつ，一緒にいて気楽なやつ —— 女たちのことを話すときの話し方とか，男同士でする種類のジョークとか，そういう点で気楽，という意味です ——，何でも引き受けてくれるやつ，自分の国への奉仕を終えた堂々としたやつ，喧嘩を恐れないやつなどとみなすのです。それにたいして，女たちはエルヴィスをまずシビれるほどセクシーだと感じます。彼はがたいがいいし，優美でアスリートのような体をしている —— 少なくとも若い頃はそうだった。颯爽とすることを恐れないし，センシティヴであることも恐れない。幼い少年のようにナイーヴで，遊び心があり，理想家で，どこに出しても恥ずかしくない恋人だし，守ってくれるし，母親思いの息子だし，云々。知識人やアーティストがエルヴィスに腰砕けになるのは，彼がわれわれの最も基本的な神話のきわめて多くの切断面を映し出すからです。彼のナラティヴには抗えません。それは英雄のナラティヴであり，しかもおそらくは，他のいかなる著名人，それどころか大半の英雄-神と比べても，英雄神話のひとつひとつのパートをより完璧に表現するナラティヴなのです。

気がつけば，おもしろいことに，私はエルヴィスの音楽に言及してきませんでした。それはたぶん，エルヴィスのトータルな現れかたのうち，小説・映画以外の場所ではあまり

にも多くのことが進行しているからです。しかし，音楽は彼のエクスカリバーです ―― 音楽こそ，エルヴィスが岩から引き抜いた剣であり，彼がその神々しいパワーを何度もくりかえし発揮することを可能にする手段にほかなりません。もちろん，そんなことができるのは，パワフルなパフォーマーだけです。そしてエルヴィスはまちがいなくそういう存在だった ―― 私はこれまで，聴衆を魅了し，聴衆にインスピレーションを与え，最終的には聴衆を圧倒してしまうキングの能力について，畏敬の念をもって話さないミュージシャンがいると耳にしたことはありません[12)]。

ドン・デリーロは，1985 年，『ホワイト・ノイズ』を出版して，（架空の）アカデミーにエルヴィス研究をもちこみます。多くの著者がエルヴィスを能動的に，そしてひとりの登場人物として，描き出すことを選んできたのにたいし，デリーロは，時代にはるかに先駆けて，エルヴィスをしっかりとカルチュラル・スタディーズの地図の上に措くのです。「丘の上大学（カレッジ・オン・ザ・ヒル）」のある講義のさなかに，ヒトラー研究の教授，ジャック・グラッドニーと，エルヴィス研究の教授，マリー・シスキンドのあいだで，次のようなやりとりが交わされます ――

わたしは黒眼鏡をかけ，顔をしゃきっとつくろって部屋へ入っていった。なかには二十五人か三十人くらいの若い男女が，大部分秋らしい色の服を着て，肘かけ椅子やソファーやベージュの広いカーペットの上に坐っていた。マーレイは話しながら，右手をある決まったやり方で振りながら，彼らのあいだを歩きまわっていた。わたしを見ると，内気そうに微笑んだ。わたしは壁を背にして立ち，不気味そうに見えるように，黒いガウンのなかで腕を組んだ。

マーレイは思索に富んだ長談義の真っ最中だった。

「彼の母親はエルヴィスが若死にすると知っていただろうか？ 彼女は暗殺について話した。〔…〕彼女は彼の夢遊病を心配していた。彼が窓から飛び下りてしまうのではないかと思っていたのだ。私には母親というものがどういうものか感じられる。母親というものは実によくわかっているのだ。昔からの言い伝えは正しいよ」

「ヒトラーは母親を崇拝していた」とわたしは言った。

言葉にならないが，沈黙のなかでの確かな集中，内面の緊張状態にあるときにのみ確認できる，注意の波。マーレイはもちろん，動き続け，ただしそれまでよりほんの少し慎重になって，椅子や床に坐っている学生たちのあいだを通りぬけた。私は腕を組んだまま，壁を背にして立っていた。

「エルヴィスとグラディスはよりそって寝て，いちゃつくのが好きだった」と彼は言った。「二人は彼が大人の身体になりはじめるまで，同じベッドに寝ていた。二人ともずっ

と，互いに子どもみたいな口調で話していた」

「ヒトラーは怠けものの子供だった。彼の成績表は不可ばかりだった。それでもクララは彼を愛し，甘やかし，父親が与えることができなかった愛情を彼に注いだ。彼女はもの静かな女性で，控えめで信心深く，料理が上手で，良き主婦だった」

〔マーレイ〕「グラディスは毎日エルヴィスを学校に送り迎えした。〔…〕」

〔ジャック〕「ヒトラーが我々の言う母親っ子（ママズ・ボーイ）であったことは，少しも疑いの余地がない」〔…〕

〔マーレイ〕「エルヴィスはグラディスの病状が悪化してからは，彼女が自分の目の届かないところにいることが耐えられなくなった。彼は病院で徹夜の看病をした」

〔ジャック〕「彼の母親がひどい病気にかかったとき，ヒトラーはもっと彼女の近くにいられるように，ベッドをキッチンに持ち込んだ。彼は料理や掃除をした」

〔マーレイ〕「エルヴィスはグラディスが死んだとき，悲しみのあまり取り乱してしまった。〔…〕」

〔ジャック〕「クララの葬式は三百七十クローネかかった。ヒトラーは墓場でおいおい泣き，意気消沈し，自己憐憫に陥った。〔…〕

〔マーレイ〕「グラディスの死がキングの世界観の中心に，根本的な変質を引き起こしたことは，まあ間違いないところだ。〔…〕彼は現実の世界から後退し，自分自身の死の境地に入っていった。〔…〕エルヴィスは死ぬと脅し，自分自身も死に怯えた。各地の埋葬を弔うツアーに出たり，UFO に興味を抱いたりした。〔…〕」[13)]

デリーロの架空のアカデミック・ワールドの外部では，もっと奇妙なことが起きていました。エルヴィスという，大学の教室に足を踏み入れたことなど一度としてなかった男が，なんと本物のアカデミアに入場したのです。メンフィス大学のジョン・バッケ教授は 1979 年，エルヴィスの死の僅か二年後に，エルヴィスについてのアカデミックな会議を組織しました。2010 年 3 月，彼はこう書いています ——

ここしばらくはエルヴィスのことを考えたことがありませんでしたが，私の頭のなかでは，エルヴィスがわれわれの想像以上に長くアカデミックな関心の的であり続けることは疑う余地がありません。なぜか？ それは，彼が 1950 年代半ばに巻き起こした波の大きさと，彼の人気の息の長さは，まさに「神の平和」のように，単純に「いっさいの理解を超えている」からです。〔…〕

他方で，事実かつ神話としてのエルヴィスが，ワイアット・アープのように，ひとつの文化的十字路において，アメリカ文化史の動かすことのできぬ一部となる日が来る以上，

それぞれの世代が彼をとおして，自分たちのパースペクティヴを提示したり，あるいは自分たちの価値やパースペクティヴを発見したりしなくてはならないでしょう。もっとも，そのように言ったところで，「大エルヴィス」のようなものが見つかるとか，エルヴィスが何かの亜種になるだろうとか，そんなふうには思えない。どちらかをもっている，もしくはどちらかになるであろう人の数は，もしそんな人がいるとしても，ごくかぎられています。しかし，エルヴィスとか，エルヴィスとロックンロール革命とか，エルヴィスを何かに結びつけて，たとえばエルヴィスと人種間関係とか，そういうテーマで授業が行われるポテンシャルはつねにあるでしょう。〔…〕エルヴィスのレコードはまだまだ健在だし，エルヴィスの映画はますますポピュラーになっています。そしてグレイスランドも一向に衰えない。私がエルヴィスに関心を抱くようになったのは，言うべきことをあれほどたくさんもっているように見えたいわゆる60年代社会派アーティストたち全員を足し合わせてもなお，エルヴィスが意味していたことがらの多さには遠く及ばない，とハタと気づいてからでした。当時，エルヴィスについて書かれた本はほんの二，三冊しかありませんでした。ジェリー・ホプキンズがあのパイオニア的伝記〔『エルヴィス―伝記（Elvis: A Biography)』(1971)〕を出版すると，大騒ぎになりました。そこで私は，ジェリーやグリール・マーカス，デイヴ・マーシュ，ピーター・ギュラルニックその他を一堂に集め，オーティス・ブラックウェルやジュード・フィリップス，エディ・レイといったアーティストや音楽関係者と一緒にして，ここには真面目に研究するに値する何かがあることをはっきりさせてやろうと決心したのです。そのこと自体にはもう議論の余地はありませんでした。それから，私は1995年にスミソニアンで，1950年代についてのセミナーの一環にエルヴィスについてレクチャーしたこともあります。

いまとなっては信じがたいですが，エルヴィスなどけっして長続きしないと私に告げた1956年の教師や説教師やその他大勢のひとりに，いつの日か私はスミソニアンでエルヴィスについて真面目なトークをすることになるのですよ，と私が言ってやったとしたら，彼らは私を捕まえる網を探しに行ったことでしょう[14]。

ジョン・バッケが1979年に組織した会議の出席者のひとり，グリール・マーカスは，その後，1991年に『デッド・エルヴィス ―― ひとつの文化的オブセッションのクロニクル』という分析を書きましたが，これはバフチン的オーヴァードライヴを駆使して練り上げられた研究であり，鋭い観察の書です。マーカスはバッケの最初の挑戦に応えて，真面目な研究の主題としてエルヴィスに取り組んだのであり，おそらく彼の仕事の最も優れた点は，エルヴィスについて書いてきた著者たちを叩いたことです。1981年の伝記[15]でアルバート・ゴールドマンが仕掛けたエルヴィスを誹謗するキャンペーンのことを，マーカスはこう断じています ――

ゴールドマンの『エルヴィス』は，その背後に金がなかったら，金が作った本だという意識がなかったら，五八九頁を費やしてアルバート・ゴールドマンの方がエルヴィス・プレスリーよりもすぐれているということを証明してみせようとした本にすぎなかったことだろう。ゴールドマンが以前に書いた『さてみなさん，レニー・ブルース!!』が，アルバート・ゴールドマンの方がレニー・ブルースよりヒップだということを五六五頁かけて証明しようとしたのと同じようにだ[16]。

プリシラ・プレスリーの回想録『エルヴィスと私』について，マーカスは，エルヴィス正典（カノン）の回想録中「随一の無味乾燥な」一冊だと述べ，さらにこう付け加えます ——「エルヴィスと結婚した女性の回想録が〔…〕どう見ても，どの用心棒／相棒による本よりもおもしろくないということは，二人の関係がどんなものであったかについて〔…〕多くを語ると言えるだろう」[17]。マーカスはまた，プリシラの回想録には「たっぷりした余白と広い行間が目立つ」[18]と記しています。このように見てくると，あたかもマーカスの胸に一物があるかのように聞こえますが，実際にはそうではありません。彼はあくまでひとつの文化的歴史的パースペクティヴのなかにエルヴィスを位置づけようというガルガンチュア的作業に取り組んでいるのであって，それを行うにはエルヴィスが歴史的な存在であると認識することが欠かせないのです。マーカスはこう書いています ——

問題は，エルヴィスが単に音楽の歴史を変えたのではないということである。ただし，もちろん，音楽の歴史を変えはした。彼は歴史を変え，そうしながら，自分が歴史になったのだ。決定的に，明確に歴史の一部ではないのと同様にである。そして，歴史を変えるということは，正確には算出できないこと，あるいは，これだとはっきり指摘できないことを行うことだということは，付け加えて言っておかねばならない。それはひとつの不可思議を，神秘を創り出し，追求することである，エルヴィスが何かを行ったということは ——〈ミルク・カウ・ブルーズ・ブーギ〉も〈ハウンド・ドッグ〉も正確には計れないから，彼が行ったことはぼくらには明確には分からない —— この世の中が，彼が何も行っていなければ今とはちがうものになっていただろうということを意味し，また，半分が不明のセンテンスは，それがとにかくももっているところの何かを意味する力次第で理解されなければならないということを意味している。エルヴィスが出現したために，エルヴィスという出来事（イヴェント）のために，ぼくらが彼から作り出したもののために，南北戦争から公民権運動に至るまでのアメリカ，ジョナサン・エドワズからエイブラハム・リンカンに至るまでのアメリカは，エルヴィスがいなかった場合のアメリカとは，違ったものになった。その出来事のために，あの瞬間，五〇年代半ばは激しく揺れ，動き出したのだった。あの出

来事のために，未来は，その出来事がなければ妨げられてしまっていたと思われる可能性をもっているのだ[19]。

そしてもちろん，そこからの帰結として，エルヴィスが物事の見え方（スコープ）を変化させたと知ることは，次のことも意味します。すなわち，歴史家，ジャーナリスト，そして文化的記録を保持するすべての人が，エルヴィス・プレスリー世界（ワールド）の，節度をもって記録された話と同様，氾濫する屑のような情報をもとおして，篩にかけられるのを余儀なくされる，ということです。

ピーター・ギュラルニックは文句のつけようがない「キング・オヴ・ロックンロール」伝記群のキングです。エルヴィスの伝記は早くからエルヴィス体験の一部になりましたが，ピーター・ギュラルニックの著作，すなわち『メンフィスへの最終列車』〔邦訳『エルヴィス登場!!』〕と『ケアレス・ラヴ』〔邦訳『エルヴィス伝 ―― 復活後の軌跡』〕の二巻からなるそれは，他の人々がエルヴィスの伝記を書こうとペンを執る気をなくさせる完璧な，そしてほぼまちがいなく最良の，理由です ―― といっても，彼の本はこれらの人々の足を踏みつけるわけではありませんが。ギュラルニックは本物の学者であり，その著作はアカデミックで，史料編纂の部類に属します ―― もっとも，他の伝記作家と同じく，彼が自分の著作の印刷に漕ぎ着けるまでには，しかるべき分量以上の駄文の山に目を通したことはまちがいありません。将来，エルヴィスのことが教えられるようになる教室で，ギュラルニックの研究はスタンダードとなることでしょう。

ギュラルニックの『最終列車』（1994）と『ケアレス・ラヴ』（1999）の出版に続いて，2003年，小説家であり文芸批評家であるボビー・アン・メイスンが「ペンギン伝記叢書」の一冊として見事な小伝記を著し，ギュラルニック以後，エルヴィス伝記的生〔Elvis-biographical life〕というものが存在することを証明しました。彼女のナチュラルな語り口は，伝記および新ジャーナリズムの双方のスタイルでエルヴィスの生涯を記録するのに適しています。冒頭から，彼女は絶妙なしかたで物語叙述（ナラティヴ）に自分の感情を忍び込ませています ――

1977年8月16日，キングが ―― エルヴィス・プレスリーが ―― 亡くなったことを知ったとき，私はノヴァ・スコシアでヴァカンス中だった。私が泊まっていた宿のラウンジのテレビがニュースを伝えた。呆然として，私はただありきたりなことをつぶやくことしかできなかった。バーテンダーはオーディ・マーフィー ―― 彼の世代の戦争ヒーローだ ―― が世を去ったときの思い出を語った。私は心細く感じた。そのころエルヴィスについてあれこれ考えたことはなかったが，そのとき私はアメリカの文化的風景（ランドスケープ）にぽっかりと穴があいたことを覚ったのだった。エルヴィスはいつもそこにいてくれた。彼は国民の心（サイキ）のなかを漂い，彼の人生が私たちの時に句読点を打っていたのだ ―― エド・サリ

ヴァン・ショーへの出演，最初の映画，彼の母の死，軍隊，結婚，1968年の「カムバック・スペシャル」〔1968年12月3日にNBCネットワークで放送された番組〕。エルヴィスが逝ってしまった ―― たった42歳で ―― なんてまるで考えられないことだった[20]。

メイスンの著書のさらにあとにエルヴィス・プレスリー伝記群の正典に加えられた質の高い作品のひとつに，チャールズ・ポンセ・デ・レオンが2006年に出版した『幸運なる息子 ―― エルヴィス・プレスリーの生涯』があります。ポンセ・デ・レオンはエルヴィスの記念碑的で神話的な地位のもうひとつ別の側面を論じています。エルヴィスは彼のあとに来た世代のロック・スターのプロトタイプでした。ハチャメチャを繰りかえしましたが，詫びる気などないに等しかった。結局のところ，彼は地図にない海を旅していたのです。エルヴィスはひとつのパターンを確立しました ―― スピードの出る車に美女たち，そして一握りの種類の麻薬が，たちまちロックンロール界の一部になりました。ワイルドな振る舞いは別にして，エルヴィスのパーソナリティのひとつの側面がいまでも世界中の何百万もの人を虜にしています。エルヴィスは慈悲深い男でした。キングがテレビを木っ端みじんにしたというような逸話ひとつに，エルヴィスが困っている友だちを助けたとか，まったく見ず知らずの人に車を買ってやったとかというエピソードが何ダースもついてまわるのです。ポンセ・デ・レオンはこう記しています ――

もともと自分の持ち物を分け与える性分だったから，エルヴィスは〔…〕家族や，友人や，仕事仲間にたいして ―― ときにはまったく見ず知らずの人にたいしてさえ ―― 猛烈に気前よくなった。カスタム・メイドの指輪やネックレスやブレスレッドやペンダントを彼らに買ってやった。彼があまりにも頻繁に，半端ではない額の宝石を購入するようになったものだから，彼のお気に入りのメンフィスの宝石商たちはラスベガスでもどこでも喜んで飛んでいき，注文を受けたりスペシャル・デリヴァリーを行ったりしたほどだった[21]。

エルヴィスの慈善行為のひとつは，何百万人もの人々に永遠に恩恵を与え続けるでしょう。1961年3月，エルヴィスはU.S.S.アリゾナ記念館基金のためにハワイでコンサートを行いました。同団体はパール・ハーバーに記念館を完成させる資金を集めるのに長年悪戦苦闘していて，終わりが見えない状態でした。合衆国国立公園局の記録によると，ハワイのブロック・アリーナでのエルヴィスのチャリティー・パフォーマンスは，記念館にほぼ55,000ドルの資金をもたらしました。記念館全体にかかる金額はおよそ516,000ドルですから，エルヴィスのコンサートは計画に必要な金額のじつに10パーセント以上を稼ぎ出したことになります。エルヴィスがいなければ，U.S.S.アリゾナ記念館がいつ開館に漕ぎ着けられたか分かったもので

はありません。1961 年の彼の慈善パフォーマンスは，記念館のドアを開放するのに必要な最後の資金的ひと押しになったのです[22]。

さて，まさにこうした学術的伝記のなかで，言説の微妙なシフトが起き，エルヴィス・プレスリーをカッコいいとか滑稽だとかというたんなる個人レベルの追想の対象としてではなく，むしろ彼が生きた時代の，そして今日の，ポピュラー・カルチャーの文脈で論じうる重要な歴史的人物として，考察することが可能になりました。エルヴィスを定義する大戦闘に塹壕戦のようなものがあるとすれば，ノートルダム大学でアメリカ研究を教えるエリカ・ドスは，まさにそのような戦いの末にエルヴィスについてのアカデミックな萌芽的著作を創造します。『エルヴィス文化 —— ファン，信仰（フェイス），イメージ』は 1999 年に出版され，ドスがエルヴィスのファンに行ったインタヴューが興味を惹くだけでなく，エルヴィスの性，霊性（スピリチュアリティ），そして遺産についての彼女の着目は，いまも批評理論の最も現代的なトレンドのなかで息づいています。

冒頭で，ドスは「なぜエルヴィスなのか」と問うています。これは，アメリカ文化におけるエルヴィスの役割にたいする最も内在的な問いとなってきた問い，すなわち，エルヴィスにまつわるいったい何が，大衆の視界にこのようなメタ-アイコン的レベルで彼を留まらせるのかという問いを，単純化したものにほかなりません。ファンがエルヴィスとエルヴィス自身の個人的な霊性（スピリチュアリティ）とを霊的（スピリチュアリー）に解釈するときのやりかたを探りながら，ドスは「ファンが理解するエルヴィスの宗教性は，一般に，ファン自身の個別の宗教的信条に対応している」[23] と述べています。性的な意味で，ドスは「エルヴィスの現在の文化的ポピュラリティは，女性や男性，ストレートやクィアが，彼を性的なアイコンとして見るいろいろな角度に広くリンクしている」と[24]考えているのです。言い換えれば，シェイクスピアやジェーン・オースティンや南北戦争のように —— ちょうど理論が理論家に似るのと同じで —— 究極的には，個人が見ているエルヴィスは，視る者（ヴューワー）によって強く加工されています。エルヴィスの大いなる魅力（アピール）のひとつは，彼の肖像が視る者によってかくも容易に彩色されることなのです。ドスの著作は，発表されてからすでに十余年が経過しているとはいえ，エルヴィスのイメージ管理のフィールドで誰がプレイしているのかを数えるすぐれた一覧を提供してくれます。グレイスランド（これはエルビス・プレスリー・エンタープライゼズという法人の利害とエルヴィスを営利目的で用いるメカニズムの別名（メトニム）です）とその独占化の努力に迫る彼女の視点はそうとう手厳しいものです ——

> エルヴィスの表象は，矛盾を含んだ当座のものであって，けっして満場一致の解釈にもとづいて理解されたり合意されたりしたことはなかった。ところが，EPE〔エルビス・プレスリー・エンタープライゼズ〕の世界にはクリーンで高潔なエルヴィスというひとつの「オフィシャルな」イメージがあるだけで，それによると，エルヴィスはまるでテューペロウ／メンフィスという子宮を飛び出すが早いか，いきなり完全に成長した英雄的で自律的な

ロックンロール・キングになったかのようにみえる。彼のほんとうの歴史 ―― 人種をまたぎ，ジェンダーをまたぐ侵犯的歴史 ―― を無視し，否定し，彼のもっとダーティで堕落的な部分を拭い去り，彼の腐敗した面を修正して，グレイスランドが提示する「オフィシャルな」エルヴィスは，まさに自然史博物館に展示された詰め物入りのエキゾティックな動物さながらだ。剥製術とは，つまるところ，まさに命なき者の腑を取り除き，それをまるで生きているかのように見えるものに，だからリアルな（あるいは「オフィシャルな」）ポーズや背景に，はめ込むことだ。グレイスランドに保存されているエルヴィスは，いまだに 1957 年のヒットシングルのテディベアのままであり，あの無骨で危険なロカビリー反逆児の気迫やダイナミズム ―― およびスキャット ―― はすべてどこかへ消えてしまった。EPE の「オフィシャルな」エルヴィスは，衛生学的に不毛で，上昇志向のあるミドルクラスの常態と達成の見本になっている。それは保守的で管理されたエルヴィスであり，継ぎ接ぎもなければ複雑なところもなく，ほとんど独占資本のシンボルでしかないものとして固定され ―― 麻痺させられてさえ ―― いるのである[25)]。

2002 年，エルヴィス逝去 25 周年を記念して，メンフィス大学の文芸誌『リヴァー・シティー・ジャーナル』は夏期特集号をエルヴィスに捧げました。エルヴィスをテーマにした小説や詩が掲載されましたが，そのなかに，ジェイムズ・ヘンリー・レイ・ハントの「ジェニーはぼくにキスした」を巧みに下敷きにした T. S. ケリガンの「エルヴィスは私にキスした」があります ――

「エルヴィスは私にキスしたのよ」と彼女は誓って言う，
ネオン・ダイヴのカウンターに座り，
ドリンクをペアで注文しながら。
二つ向こうのスツールで，きみはビールのグラスに手を添える，
ここでは簡単に横取りされてしまいそうだから。
「68 年のことよ」と彼女はため息をつき，
その黄色い髪を後ろへかき流す。
落ちたマスカラで黒ずんだ目の周り。
きみは近寄って，どこかで会いましたねと言い，
煙草を一本彼女に差し出す。
「安っぽい女と呼んでいいわ」と彼女はむせび泣く，「あるいは悪い女と。
まともな男たちは私をお払い箱にしたと言っていいわ，
私はもう見栄えもよくないと言っていいわ，でもこう付け足してちょうだい，

エルヴィスは私にキスした，と。」[26]

エルヴィスが女性たちに与える効果（イフェクト）は，もちろん，文学的分析および歴史的分析のどちらにおいても，エルヴィス言説（ディスコース）のひとつの主要テーマです。写真家アル・ワートハイマーが『21歳のエルヴィス ―― ニューヨークからメンフィスへ』に記したように，彼が1956年にエルヴィスに出会ったとき，「〔…〕何よりもまず，彼は女の子たちをキャーキャー言わせた〔…〕」[27]。少女たちをキャーキャー言わせることを，芸術的価値のタームで測ることは不可能です。パガニーニやリストのような人たちの例を思い起こしてみましょう ―― 彼らは自らの才能とパーソナリティで部屋を満員にできた本物のヴィルトゥオーゾたちでした。女性たちはこれらの男性に惚れ込みました。パガニーニやリストが演奏したコンサートの記録映画のようなものがもし残っていたら，エルヴィスが巻き起こしたのと同じような熱狂がそこにも見られるかもしれません。

2010年，アランナ・ナッシュは，エルヴィスの女性にたいする情熱についてのどっしりした伝記的研究『ベイビー・レッツ・プレイ・ハウス ―― エルヴィス・プレスリーと彼を愛した女たち』を発表しました。エルヴィスは女性とうまくつきあいましたが，若いころに女性の親たちが彼や彼の性的ふるまいに怖れをなしたという事実は別です。親たちが娘の性にたいして抱くこれと同じ怖れは，まさに最初のアメリカ小説である『シャーロット・テンプル』のテーマにほかなりません。両親の言うことを聞かず，家出をし，果てはニューヨークで，結婚をせずに男と子どもと生きることになる少女の物語です。ナッシュはこう主張して譲りません，すなわち，エルヴィスのセックス・アピールの一部は女性たちとの密接な関係に由来していたのであり，彼の「秘（ポ）め（テ）られ（ン）た（シ）力（ー）はたんに女性たちをシビれさせるものを的確に翻訳するだけでなく，女性たちの行動を模倣して彼女たちに投げ返す能力にこそ存していたのである」[28]，と。1956年の『ミルトン・バール・ショー』でエルヴィスが披露した二つ目のパフォーマンスでの腰の旋回は，音楽批評家やテレビ評論家から辛辣な批判を浴びましたが，このパフォーマンスは「エルヴィスを一方では文化的脅威として，他方では革新的な創造的現象として，同時に規定することになるのである」[29]とナッシュは指摘しています。

エルヴィス文学全体の定数ともいえるもうひとつのテーマは，霊性（スピリチュアリティ）です。このことは，やはり2002年の『リヴァー・シティー・ジャーナル』特集号に発表されたジョン・アップダイクの詩「イエズスとエルヴィス」にも反響しています。

〔イエズスの〕死の20年後に，聖パウロは
最初の手紙を書き送り，
神話や信仰に満ちた記憶の断片の数々 ――

何切れかのパンで何千もの人の腹を満たしたとか，死んだ幼い少女が
「タリタ・クミ」〔少女よ，起きなさい〕と言われて立ち上がったとか —— がひとりでに寄せ集められて，
ゴスペルの元になった。クスリと
チリバーガーが別のひとりを終わりにしてから 20 年がたち，
グレイスランドに集まってきたのは，たんなる信者たち，
ひからびた中西部からきたターンパイク巡礼者たち，
白髪になって見分けがつかなくなった母と娘，
マリアたちとラザロたち，きみとぼく，
誰の頭も，歌と，それから手作業で彩色された幻ではち切れそうだ，
ひとりのラヴリーな若い男の歌と幻，無頓着でクールなところが
百合の花のような男の。彼は生きている。われわれは生きている。彼は生きている[30]。

エルヴィスは霊的(スピリチュアル)な知を求めてやみませんでした。もっとも，相当に標準的で，きわめて南部的な，プロテスタント・キリスト教には，彼は与したことがありませんでしたが。エルヴィス・プレスリーの霊的な性格については，ドスがアメリカ文化の文脈において注意深く考察していますが，この性格はまた，もっと問題含みな著作を生み出す動因にもなっています。

レーダーにポンと現れる奇妙なエルヴィス本を数えればきりがありません。たとえば，レイモンド・ムーディ（哲学博士，心理学博士，医学博士）著『エルヴィスの死後の生(アフターライフ) —— スーパースターの死をめぐる異例の心的経験』がそれです。ムーディの主張によれば，彼は「けっして超常(パラノーマル)現象の可能性を証明したり反証したりしようとしているわけではなく」，むしろこれらの経験が「人間の心(マインド)と霊(スピリット)について何を啓示するのか」に「興味をそそられて」[31] いるのだといいます。ムーディはクロードという人物が彼に語ったという逸話を記録しています ——

あるとき，ぼくが革紐で縛られているのを，エルヴィスが助け出してくれたのです。ぼくがそんな目に遭っていることにエルヴィスがどうやって気づいたのか，ぼくには分かりません。彼はぼくにこっそりお金をくれ，ぼくは物品収集のトラックに乗せてもらいました。

あの日の午後，それはエルヴィスが亡くなった日で，ぼくは家のすぐ裏の盛り土のてっぺんに登り，怪我をした牛の番をしていました。家が建つ丘の斜面を見下ろすと，エルヴィスがこちらのほうに歩いて登ってくるのが見えました。彼は以前と同じように見えましたが，ただ，最初のうち，青い煙か霧のように見えるものが彼の周りに，といっても

うっすらとですが，かかっていました。エルヴィスは私のすぐそばまで歩いてきたので，私はこう言いました。「エルヴィス，こんなところでいったい何をしているんだい？」地方道路からこっちに彼が車で上がってくるのを私は見なかったので，どうやって彼がここまでたどり着けたのか，私には見当もつきませんでした。

エルヴィスは私から10フィートほどのところまで来ていました。彼の顔に笑みが浮かんでいるのが見えます。彼は言いました。「しばらくいなくなるので，お別れを言いに来たんだよ，クロード」。

ちょうどそのとき，妻のセルマが「クロード！」と叫ぶ声が聞こえたので，私は盛り土の反対側の，家のあるほうを見下ろしました。家の裏手の網戸が跳ね開けられ，セルマが庭に飛び出してきました。最初は台所が火事になったかどうかしたにちがいないと思いました。それほどセルマは慌てて走り出てきたのです。彼女の口から何が飛び出してくるのか，にわかには分かりませんでしたが，とうとう彼女がこう告げるのが聞こえました。「エルヴィスが死んだんですって！ ラジオでそう言ってるわ。」

〔…〕ぼくはエルヴィスに何か言おうと思ってふりかえりましたが，エルヴィスの姿はもうありませんでした。しばらくのあいだ，ぼくはエルヴィスを探してやぶのなかを歩き回りました。私にはいま起こったことが信じられませんでした。エルヴィスはいままでそこにいたのに，一瞬後には姿が消えていたのです[32]。

エルヴィスの目撃証言とか，エルヴィスとUFOとか，エルヴィスの幽霊とかをテーマに書かれた本や，想像しうるあらゆる種類の陰謀（エルヴィスはマフィアに暗殺されたのだとする説まであります）について書かれた本もあり，ご自分もエルヴィス本収集をはじめてみようと思われる向きには，メアリー・ハンコック・ハインズによる学術的な著作『無限なるエルヴィス――注解つき文献一覧』をおすすめします。この本に付されたレヴューには，こう記されています――「驚くほど詳細に編まれたこの本は，おそらくそのなかに挙げられているどの著作よりも価値ある一冊である」[33]。エルヴィス文献はどんどん増殖しているため，2000年に出版されたこの本は，それがバーンズ・アンド・ノーブル〔米国の大手書店チェーン〕の店舗に並んだ時点で，すでに最先端のものではなくなってしまっていた可能性があります。しかしながら，『無限なるエルヴィス』は真に手にとる価値のある一冊です。Amazon.comのおかげで，エルヴィス学者（エルヴィソロジスト）は現代のエルヴィス文献の発展に後れをとらずにいることができるとはいえ，ハインズはソフトウエアやサーチ・エンジンが必ずしもカヴァーしてくれない方面にまで手を伸ばしたのです。彼女によれば，エルヴィスについて大学院生が発表した最初の論文は，1958年にルース・パール・グラネッツがシカゴ大学に提出した修士論文でした[34]。おもしろいことに，グラネッツの論文のテーマは，エルヴィスが少女たちに与える情動的インパクトであり，

これは，そのたった二年前に，アル・ワートハイマーが数か月にわたってエルヴィスの歴史的な写真をとり続けるあいだに行った観察に相似的です。

ミュージアムのなかのエルヴィス

ヴィジュアル・アートの世界もまた，死後のエルヴィスのイメージ ―― トリビュート的，アレゴリー的，風刺的なイメージ ―― の陳列所になりました。今日，エルヴィスは地上のあらゆる場所にいる作家によって，あらゆる可能な形式およびメディアを駆使して生み出される作品の主題になっています。彼の顔はもはや，歌ったり踊ったり銀幕でグッド・ガイを演じたりした男の顔ではなく，むしろ，その隠喩的なキャラクターが彼を写しとる作家たちのものの見方や情熱を映し出すところの，ひとつのアイコンの顔にほかなりません。1994 年にはじまった展覧会『エルヴィス＋マリリン ―― 2×不死』はアメリカ全土の 10 都市で巡回展を行いました。ウェンディ・マクダリスが組織したこの展覧会には，エルヴィスとマリリンを共感的に，風刺的に，あるいは太らせたり，コスチュームを着せたりしてフィーチャーした多くの現代のアート作品が含まれていました。カタログに収録されたエッセイのひとつ，ゲイリー・ヴァイカンの「聖域としてのグレイスランド」は，エルヴィス現象を中世の文脈に置き，グレイスランドを巡礼の聖地として論じています。彼の言説は，巡礼に何が要求されるのかについて，巡礼者／旅行者と経験の相互関係（エクスチェンジ）に注目するのです[35]。この展覧会が示すように，現代美術におけるエルヴィスの解釈は，文学や歴史叙述におけるそれと類似のトレンドを追いかけてきたのだといえます。

2010 年，スミソニアン・ナショナル・ポートレート・ギャラリーは，エルヴィス・プレスリー生誕 75 周年を記念する展覧会『ある人生 ―― エルヴィスの残響』を催しました。この展覧会で取り上げられた作家たちの着想は，エルヴィスと呼ばれるあの神話的現前の内部のさまざまに異なる場所に発しているように見えます。『エルヴィスの残響』展のために作品を選ぶ際に用いられた基準はじつにシンプルなものでした。すなわち，エルヴィス死後の時代の作品であること，そして嘲笑的であるよりはトリビュート的な作品であること，この二つでした。これらの作品は，エルヴィスの死後にエルヴィスのイメージをあしらったアート全体を代表するわけではありません。そうしたアートの多くは，どぎつく，拙劣で，エルヴィスをあしらったひたすら下品なだけの作品は枚挙にいとまがありません。そのようなクオリティだからといって，すべてがダメな作品であるとはかぎりませんが，これらの作品の負の性格はその芸術的な「であること is-ness」を大幅に踏み越えていました。

『エルヴィスの残響』展には，ハワード・フィンスターのような夢幻的作家による作品も含まれていました。人として，また〔バプテスト教会〕牧師としてのフィンスターは，エルヴィス

の控えめな気質とキリスト教への献身に惚れ込んでいました。エルヴィスは称号を与えられることを好まず，神を愛していたからです。そのことが，作家としてのフィンスターを大いに惹きつけました。他の作家たち，たとえばレッド・グルームスやロバート・アーネソンは，エルヴィスのユーモラスな側面に目を向けています。アメリカ美術にとってのレッド・グルームスは，アメリカ文学にとってのマーク・トウェインにも等しい存在，いうなればアメリカ美術界きってのユーモリストです。肖像画家ラルフ・ウォルフ・カウワンの油彩画「エルヴィス・プレスリー」(1976–1988) は，若き日の理想化されたハリウッド・エルヴィスです。これはまさに，カウワンが最初にこの作品の下絵を描いた時代に，エルヴィスが自分自身をまさにこう見たいと望んでいた，その姿にほかなりません。エルヴィス・プレスリーその人を写した写真や他のイメージは無数にあるものの，エルヴィスが生前に自分の肖像画を描かせた画家はカウワンだけでした。

エルヴィスと人間経験の強化および拡張

締めくくりに移る前に，いくつかの思弁的な問いを扱ってみたいと思います。すなわち，エルヴィスについてさらに踏み込んだ神話的タームで考察し，エルヴィスは自分自身のことをどう考えていたのかと問うてみたいのです。彼は自分を人間とみなしていたのでしょうか，神とみなしていたのでしょうか，それとも〔人と神の〕ミックスと，あるいは混沌とみなしていたのでしょうか？ いくつかのケースでは，ここで私の立てている問いのヴァリエーションが他の学者たちによって提示されてきましたし，私はこれらの問いを他の学者たちに向けてみたこともありますが，私の知るかぎり，これから私が示す問いやコメントは厳密に私個人のものです。調査のフィールドをもっと広げれば，この領域に属する問題についてなされた未発表の研究は少なくないでしょう。しかし私の知るかぎり，以下の一連の問い，コメント，および見解によって，私は新機軸を打ち出すことになります ——

エルヴィスは自らをスーパーヒーロー的，もしくはキリスト的な人物と考えていただろうか？ きわめて信心深かった少年エルヴィスは，長じて霊的に混乱した人物になりました。世界のかくも多くのことがらを見，戒めの連なる文句や救い主の説教を操り，その同じ文句を少なからず実践してきたエルヴィスは，たぶん自分自身を救世主的な何かであるとみなしていた，と考えるのは，意味のないことではありません。そう主張するだけの証拠はあるでしょうか？ そう，金銭と施しとがあります。病人を癒やしたり，死者を蘇らせたりする力には恵まれなかったがゆえに，エルヴィスは次善の策に出ました。つまり，金銭の施しを慈善事業（チャリティ）に —— 多くの慈善事業に —— 行ったのです。

エルヴィスは自己の力を増幅するのに火器を用いた —— エルヴィスと火器にまつわる逸話

は尽きません。アメリカ大統領リチャード・ニクソンへの手土産にホワイトハウスに銃を持参したエピソードにはじまり，ラスベガスのホテルの部屋のテレビを銃で吹き飛ばした事件に至るまで，キングはたえず火器を持ち歩き火器に守られることを求めました。〔宗教的〕歓喜の可能性を信じるペンテコステ派的世界のうちで育ったエルヴィスにとって，善対悪の構図をもち，それゆえ家庭を守ることが必要になるこの物質世界で生きるためには，銃がなくてはなりませんでした。アメリカのカウボーイと西部劇の偉大な英雄神話的（モノミシック）人物を見ながら大人になっただけに，エルヴィスは銃を自分と家族を守る能力の拡張と捉えていたのです。また，メンフィスやミシシッピーで貧しい少年時代を過ごしたため，エルヴィスは高価なおもちゃをもつ機会に恵まれませんでした。火器に加え，自動車，バイク，そして飛行機にたいするエルヴィスの思い入れは，貧家の子には夢にも手が出せなかった遊び道具にたいする，成長した大人の情熱をも映し出すものだったのです。

ヒーローの武装は，たんにジョーゼフ・キャンベルその他が英雄文学の数多くのエピソードを通じて注目してきたひとつのモティーフであるにとどまらない。これは人類が携わるひとつの実践である —— 初期のロックンローラーたちのダッフル・バッグに入った一片の神聖な装具を歌った曲すらあります。身につけるアイテムを歌った曲も数多く作られてきました —— 歩くためにあるブーツ〔ナンシー・シナトラの 1966 年のヒットナンバー *These Boots Are Made for Walkin'*（邦題：「にくい貴方」）〕，ラズベリー色のベレー帽〔プリンスの 1985 年のシングル *Raspberry Beret*〕，安手のサングラス〔マシュー・コーマをフィーチャーした RAC の 2014 年のナンバー *Cheap Sunglasses*〕，それから小っちゃなちっちゃな黄色い水玉ビキニ（イッツィー・ビッツィー・ティーニー・ウィーニー・イエロー・ポルカドット・ビキニ）〔ブライアン・ハイランドの 1960 年のヒットナンバー *Itsy Bitsy Teenie Weenie Yellow Polkadot Bikini*（邦題：「ビキニスタイルのお嬢さん」）〕など，他にも挙げればきりがありません —— が，これらの曲のいずれもカール・パーキンズの青いスエードの靴（ブルー・スエード・シューズ）と同じワードローブには入りません。パーキンズとエルヴィスがヒットを記録したこの曲は，1955 年，パーキンズがサン・スタジオの仲間だったジョニー・キャッシュの示唆に応じて書いたものです。広く知られた説によれば，この歌のアイデアが生まれたのは，キャッシュが米国空軍におり，同僚のある飛行士が「オレの青いスエード靴を踏むなよ」と言うのを耳にしたときでした。これらのミュージシャンたちが彼らの栄えあるロックンロール競争を走り終えるころには，サン・スタジオの「ミリオン・ダラー・カルテット」の四人のオリジナル・メンバー〔エルヴィス・プレスリー，カール・パーキンズ，ジョニー・キャッシュ，ジェリー・リー・ルイス〕全員が，ひとつのファッション主張（ステイトメント）を歌ったこの曲をカヴァーしていたといいます。そしてこのファッション・ステイトメントは，ロックンロールの闘争のためにドレス・アップするロックンロール戦士に見合うものでした。

非正統的なファッション・ステイトメントは初期のロカビリー体験及びロックンロール体験全体を表す隠喩です。ブルー・スエード・シューズはより厳格な過去からの断絶であり，ア

メリカの若者は自分のことを自分で決めるという宣言でした。アメリカのカウボーイたちが回転式銃（リヴォルヴァー）とあの名高いカウボーイ・ハットで武装したように，初期のロックンローラーたちはカウボーイ・ブーツの代わりにブルー・スエード・シューズを履いたのかもしれません。1950年代のブルー・スエード・シューズは1960年代のサンダルと1970年代のあれやこれやに道を譲ることになるでしょうが，足下のさまざまな装いはどれも若いアメリカ人たちの新しいアイデンティティとパワーを象徴するものだったのです。

センチメンタル・ジャーニーについて歌ったドリス・デイと，人の靴を踏むより家に火をつけたり車を盗んだりするようにとそそのかすカール・パーキンズとのあいだには，ひとつの海ほどの開きがありましたが，この二曲は，10年足らずの違いで，同じ世界に共存していました。アメリカ音楽は，アメリカ文化の残りの分野と同様に，ロックンロールの誕生とともに，若者のほうに鋭く向きを変え，慣習から身をもぎ離したのであり，ブルー・スエード・シューズはこの新たな焦点の完璧な象徴だったのです。

エルヴィスは自分の力を増幅するのに空手を実践した —— 多くの場合，エルヴィスの関心は彼が生きた時代の副産物でした。他方で，肉体的な勇ましさへの若者らしい憧れを，彼が手放さなかった場合もあります。すぐれたエルヴィスの伝記群について書いたアランナ・ナッシュは，エルヴィスの行動の背後で彼を突き動かしていた内的な，心理的な力のひとつは，いつまでも強壮でありたい，とりわけ女性を相手にするときにそうありたいという彼の願望だった，と記しています。ナッシュによれば，「彼はラテン語でいうpuer aeternus，すなわち，神話に登場する天上的な若さをもった子ども神のような，若さを失うことがないアドニスのような，「永遠の少年」であり続けるつもりでいた」[36]のです。これは若き戦士／愛する（ラヴァー）者の元型に結びつく興味深い特徴です。たとえば，ギリシャの叙事詩『ディゲニス・アクリティス』の英雄バシレイオスは，彼の美しい花嫁を奪われないように，勇敢で力強くあらねばなりません。ドライデンはこう記しています ——

> 幸いなる，幸いなる，幸いなる男女よ！
> ひとり勇ましき者のみが，
> ひとり勇ましき者のみが，
> ひとり勇ましき者のみが麗しき婦人に値するのだ[37]。

このギリシャ叙事詩の英雄バシレイオスは，二つの血が流れる国境守護者，すなわちアクリティス〔akritis〕です。エルヴィスとバシレイオスのあいだには，興味深いつながりがあります。私たちの実在の主人公とこの神話上の騎士のどちらも，たえず色事に —— すなわち，女性たちとの霊的（スピリチュアリー）に承認されない関係に —— 囚われていました。どちらも，己の情念に抗え

ない信仰者だったのです。

バシレイオスは秀でた剣士かつ戦士であり，彼の叙事詩のさまざまなヴァリエーションを通じて，彼の征服力 ―― 敵を征服する場合でも，女性を征服する場合でも ―― に並ぶ者はないとされています。おもしろいことに，アランナ・ナッシュがつぶさに書き留めたように，エルヴィスはつきあう相手の獲得に苦労したことはなく，束の間の関係も長く続いた関係もありましたが，どちらかといえば短い関係のほうが多いのでした。先に述べたように，エルヴィスは空手を実践していました。彼が空手を習いはじめたのは，1958 年，ドイツで軍務に就いているあいだです。その後亡くなるまで，エルヴィスはこの武道を実践し，たいへん上達しました。もっとも，彼が空手を実践していたのが，彼の美しい花嫁プリシラを中世風のどんな種類の花嫁泥棒からも守るためだったとしたら，それはうまくいきませんでした。皮肉にもこの逸話はこじれ，プリシラが彼女の空手師範と関係を持ってしまったために，二人の結婚生活には終止符が打たれたのです。

エルヴィスは超常現象（ESP 及び UFO）についての知を追求した ―― これらのフェティッシュはきわめて 1970 年代的であるとはいえ，超心理学の実験装置へのエルヴィスの精神的傾倒は，霊的（スピリチュアル）な欲望と好奇心を反映しています。ひとりの人間が望みうるいっさいの物質的なモノを手に入れてしまうと，エルヴィスに残された探求は，多くの人々のそれと同じく，物理的なものを超越する力の秘密を知りたいという，きわめてジョーゼフ・キャンベル的な願望を伴うものになりました。

エルヴィスは神の騎士のごとく敬虔であり続けた――エルヴィスはユダヤ＝キリスト教的三位一体への信仰をけっして失いませんでした。おもしろいことに，エルヴィス晩年の上級霊的助言者（シニア・スピリチュアル・アドヴァイザー）のひとりは，ラリー・ゲラーという美容師でした。エルヴィスは子ども時代の信仰を手放しませんでしたが，ゲラーはエルヴィスの読書習慣をオカルトへと発展させました。ゲラーは，繰りかえしますが美容師だったので，エルヴィスと過ごす時間が長く，エルヴィスとゲラーの会話はいきおい他の人々を周りに追いやることになります。魔術と超心理学を論じるゲラーは，グループ内の霊性（スピリチュアリティ）のバランスを変質させ，ゲラーは多くの人物から，とりわけトム・パーカー大佐から，野良犬扱いされました。神秘的関係という意味で，他の人々はエルヴィスとゲラーの関係を黒協定（ダーク・コンヴェンション）とみなし，エルヴィスをキリスト教から引き離すものと考えました。フレッド・ワースとスティーヴ・タメリアスが概説本（コンペンディウム）『エルヴィス ―― その生涯の A から Z』[38] に記したとおり，エルヴィスにたいするゲラーの呪縛が解けたとき，メンフィス・マフィア〔エルヴィスが個人的に信頼していたメンフィス在住の友人たちの一団〕はゲラーがキングに与えた形而上学や民間神秘信仰についての本をひとつ残らず燃やしました。その世界で効き目をもってもいい魔術があるとすれば，それはエルヴィスによる魔術，あるいは彼の予言者（マーリン）カーネル・トムによる魔術だけだ，というわけです。

エルヴィスは精神と行動を変化させる薬物を数多く試した —— エルヴィスは，単純に，晩年のあいだ四六時中クスリをやっていたわけではありません。彼が薬学的小道具を常用していたという話は伝説にすぎません。

エルヴィスは自分の手下を使徒のように扱った —— しかし，それは奇妙な関係でした。彼は自分の考えをもって友情関係を追求し，友情の証に宝石や自動車を贈りました。しかし，キリストの場合と違って，エルヴィスには取り返しのつかなくなる点が存在しました。彼は人間関係で傷つくことがあり，いったんダメージを受けたと感じたら，とことん相手を敵視したのです。彼の親衛隊は，チンピラ，拳銃使い，空手の師範，そして「イエス」マンたちから成っていました。はじめのうち，最大の報酬はエルヴィスの取り巻きに入れてもらえることでした。しかし最後には，自らの王国の実権をますますしっかり握ろうとして，キングはろくでもない判断を行うようになります。彼にはもう誰を信頼してよいか分からず，処方されたクスリにあまりにも依存しすぎて，自分のライフスタイルから抜け出せなくなってしまっていたのです。穏やかならざる真実はこうです。彼が望むことを行う —— そして彼がやりたいようにさせてくれる —— 者は褒美をもらい，彼に逆らった者は冷や飯を食わされたのです。

エルヴィスはつねに自らを何らかの超人的身分に接続しようとした，しかし実際には，彼はすでに超人的な何かだった —— いったいだれが，あの二十年間〔1950 年代後半から 70 年代後半〕にエルヴィスが行ったことをなしえたでしょうか？ あれだけのツアー，あれだけの映画，あれだけのパフォーマンス，あれだけの女性を？

晩年のパフォーマンス中，そして折々に，エルヴィスはケープをまとった —— 彼がケープをまとったのは，漫画のスーパーヒーローたちがケープをまとっていたからでしょうか？ きっとそうでしょう。彼がケープをまとったのはまた，彼にはそれができたからです。何といっても，彼はエルヴィスだったのですから。

最後に，〔エルヴィスと神話的英雄のあいだの〕最も雄弁な相似は，おそらく最もシンプルなそれです。英雄たちや叙事詩的人物たちの生涯は，けっして世俗のものではありません。ジョーゼフ・キャンベルが「英雄神話の中核的単位」と呼ぶのは，離別〔separation〕にイニシエーション〔initiation〕が続き，イニシエーションに帰還〔return〕が続く英雄的サイクルのことです。つまり，英雄は慣れ親しんだ世俗の世界から引き離され，霊的なものや魔術的なものの世界に導き入れられ，再びキャンベルの説に拠れば，偉大な勝利を成し遂げたのちに，「仲間に恩恵をもたらす力」[39] を身につけて，かつての世界に帰還するのです。

貧困家庭の子エルヴィスが国際的名声の瞠目すべき高みへと駆け上がった，その上昇は，アメリカの著名人の歴史にまったく前例を見ないものです。コメディアンで映画スターだったW. C. フィールズ，アメリカのもうひとつの「ボロから富への物語」といってよいこの人物は，幼年期を過ごしたフィラデルフィアの自宅をティーンエイジャーのころに後にし，ハリウッド

の頂点への道を辿りました。しかし，W.C. フィールズをエルヴィス級のスターとみなす人はまずいないし，エルヴィスの場合のように何十万人もの人がフィールズの墓を訪れることもありません。にもかかわらず，もしこの二人が出会っていたとしたら，フィールズはエルヴィスにあの気の利いた金言を聞かせてやったかもしれません —— 金持ちとは金のある貧乏人にほかならぬ，と[40]。

それぞれの世代が，恵まれない境遇から出発して山の手の豪邸へと上り詰めるような著名人を，一定の割合で生み出します。しかし，そうした人の数はごく限られており，アメリカのホレイショ・アルジャー的神話〔19 世紀アメリカの作家 Horatio Alger（1832–1899）は「ボロから富への物語」と形容されうる小説を多数発表したことで知られる〕にエルヴィスほど完璧に当てはまるストーリーを自分のものにできる人は，そのうちのさらに少数です。このストーリーに含まれるのは，以下の要素です ——

エルヴィスはテューペロウのショットガンハウス（本物の丸太小屋）に暮らす貧しい両親のもとに生まれました。彼の父親は，一頭の豚を売り上げた際の伝票に手を加えようとしたため，刑務所に送られてしまいます。母親はパーチマン刑務所まで，エルヴィスを連れてお父ちゃん（ダッド）に会いにいきますが，それは彼女が夫婦面会を認めてもらうためでした。これは，もちろん，おそろしいシナリオです。エルヴィスは母親とともに刑務所の建物に入るものの，母親は父親と二人きりになるためにすぐにドアの向こうに姿を消してしまい，幼いエルヴィスはそのあいだ刑務所内の一室にたったひとり残されたのです。

その後，一家はメンフィスに引っ越し，高校を卒業したエルヴィスは一枚のレコードを売り出します。二年後，彼が録音した別のレコードがよく売れ，エルヴィスはリッチで有名な存在になります。その三年後，彼は軍隊に入ります。1960 年代になると，彼はハリウッドで信じられないほどの金持ちになります。1960 年代末にハリウッドから離れたあとも，彼はますます金持ちになり，人生の最後の九年間は頻繁にライヴでパフォーマンスを行います。彼は大量のクスリを飲み，僅かなものしか食べず，42 歳の若さで世を去ります。

その死後，エルヴィスの生涯は，ファン，フェティシスト，作家，アーティストらにとって，新たな意味を獲得しました。エルヴィスはこの世界から引き離され（セパレイティッド），死の闇に導き入れられ（イニシエイティッド），彼の音楽や映画を通じてのみならず，詩人や崇拝者たちのヴィジョンをも通じて，万人に贈り物を返す（リターンズ）のです。

ひとり非凡な人生 —— 通常は将軍や政治家，あるいは聖人らのものであって，著名人（セレブリティ）のものではない人生 —— のみが，そのような反響に恵まれます。エルヴィスの生涯は，人間のタームと神話のタームの両方で反響を与え続けています。

エルヴィスの未来

エルヴィス学（エルヴィソロジー），プレスリー愛好（プレスリーフィリア），キング研究（キングデミクス） —— ポピュラー文化研究のこの比較的新しい下位分野をいずれの名で呼んでもかまいませんが —— の王国の内部には，アカデミックな関心がまだ及んでいなかったり，アカデミックな研究がほとんど進んでいなかったりする多くの領域が存在するとはいえ，いまこの瞬間にも学者たちはこれらの領域について書いているにちがいありません ——

成り上がりとしてのエルヴィス —— グレイスランドとエルヴィスの美意識にたいする，リスペクトをもって記されることも多いコメントのひとつに，エルヴィスは文化的に洗練されることのない少年時代を過ごしたのち，いきなり大金を手にしたので，どうやって使っていいのか分からなかったのだ，とするものがあります。だから，ピンクのキャデラックに乗ってみたり，グレイスランドにごてごてした装飾を施してみたり，ステージの上でも外でもあんな衣装を身につけてみたりしたのだ，と。

危険を恐れぬ者（リスクテイカー）としてのエルヴィス —— 人々はつねにリスクテイカーを冷やかそうとします。エルヴィスのキャリアの初めのころ，彼の音楽を嫌い，彼の歌い方や踊り方，そして彼の地方男子的（カントリー・ボーイ）（「田舎者（ヒック）」的とか「屑白人（ホワイト・トラッシュ）」的と呼ばれることもある）振る舞いに反発を覚える人々は，ことあるごとに彼をジョークのネタにしたものでした。ところが，そうした世代の人々の娘たちは，彼らがエルヴィスを嫌ったのとまさに同じ理由で，エルヴィスに夢中になったのです。今日，「エルヴィス」と聞いて思い浮かぶ観念そのものが嘲笑（冷やかしとは異なるものとしての）を誘うことは，きわめて多くの真剣な美術家のヴィジョンや，エルヴィスの影響を嘲る人々の考えを見聞きすれば明らかです。しかしながら，リスクを恐れず，音楽が彼をどこへ連れていこうと，本能的に，自分の思うとおりに自分を露出させることで，エルヴィスは自らをロックンロールな，ワイルドな男の元型として確立したのです —— リスクテイカーであるがゆえに。

他者化されたるエルヴィス（初期の他者化，後年の疎外，そして死後の事後他者化〔post-mortem After-Othering〕） —— 貧家に生まれ，着るものやスタイルについて我が道を行くことを選んだエルヴィスは，早くから他者化され，周縁化されました。エルヴィスについて語られる逸話のひとつによれば，彼は他の少年たちにいじめられ，ギターの弦を切られたこともあります[41]。後年，エルヴィスは自分自身の意志で（まず，メンフィス・マフィアの陣内に身を置いたことによって，次いで，折々に彼らから遠ざかることによって），さらにその死後，彼をデブの麻薬中毒者とみなす人々によって，他者化されたのです。

エルヴィスと宇宙

音楽，アート，映画，小説，伝記，そして銀河的ヘテログロッシアの内部に見いだされる他のほとんど一切の表現形式を経て，エルヴィスはとうとう物理学にまで顔を出すことになりました。1999 年 4 月，リーディ・クリーク天文台（オーストラリア）のジョン・ブロートンが発見した小惑星 17059 は，エルヴィス・プレスリーにちなんで名づけられました ——

> （17059）エルヴィスは，3 億 3210 万キロメートル（近日点，すなわち太陽に最も近い点）から 3 億 9160 万キロメートル（遠日点，すなわち太陽から最も遠い点）の距離で太陽を回る一週 3.76 年の楕円軌道のうちにある。前回，近日点を通過したのは，世界時 2008 年 7 月 7 日 9 時である。その軌道は黄道面（太陽を回る地球の軌道面）にたいし 3.5 度傾いている。
>
> （17059）エルヴィスの物理的特性についてはほとんど情報がない。その直径すら定かではない —— おそらく 3 キロメートルから 7 キロメートルほどの範囲だろう。この小惑星を見るには望遠鏡が必要である。というのも，それが最も明るいときでも，裸眼で見ることのできる最もぼんやりした天体の 20214 分の 1 ほどの明るさしかないからだ[42]。

キングは生き続けています。

エルヴィス・ストーリーは終わったのでしょうか，それとも，私が信じるように，それはいまもまだ続いていて，私たちはそこに新たな章をつけ足していくのでしょうか？ 以下は，ロバート・ペン・ウォーレン著『すべて王の臣（オール・ザ・キングスメン）』からの一節です ——

> だが，たしかなことがあるとすれば，それはどんなストーリーも終わってはいないということだ。なぜなら，われわれが終わったと思っているストーリーは，じつはあるストーリーの一章にすぎず，こちらのストーリーには終わりがないのだから。終わったのは試合ではなく，ひとつのイニングだけ，そしてこの試合のイニングは九つより多い。試合がストップするのは，暗くなったので中断が宣告されるときだ。だが，一日は長いのである[43]。

注

1） Bobbie Ann Mason, e-mail message to author, March 23, 2010.

2） Marian J. Cocke, *I Called Him Babe: Elvis Presley's Nurse Remembers*（Memphis, TN: Phantom Printworks, 1979, reprinted 2009）, 96.

3） Nancy Rooks, as told to Jim Cox, *Inside Graceland: Elvis' Maid Remembers*（Bloomington, IN:

Xlibris Corporation, 2005), 51.

4） Priscilla Beaulieu Presley and Sandra Harmon, *Elvis and Me*（New York, NY: Berkley Books, 1986), 264.

5） Jerry Schilling and Chuck Crisafulli, *Me and a Guy Named Elvis: My Lifelong Friendship with Elvis Presley*（New York, NY: Gotham, 2007), 129–131.

6） Egil Krogh, *The Day Elvis Met Nixon*（Bellevue, WA: Pejama Press, 1994), 31.

7） Krogh, *The Day Elvis Met Nixon*, 33.

8） Krogh, *The Day Elvis Met Nixon*, 36.

9） Krogh, *The Day Elvis Met Nixon*, 36.

10） Krogh, *The Day Elvis Met Nixon*, 44.

11） William McCranor Henderson, *Stark Raving Elvis*（New York, NY: Berkley Books, 1997), 100.

12） William McCranor Henderson, e-mail message to author, March 16, 2010.

13） Don DeLillo, *White Noise,* 25th–ann. ed.（New York, NY: Penguin, 2009), 70–72.（ドン・デリーロ／森川展男訳『ホワイト・ノイズ』，集英社，東京，1993 年，76–78 頁。ただし，原文に従って，訳文を一部改めたところがある。）

14） John Bakke, email message to author, March 16, 2010.

15） Albert Goldman, *Elvis*（New York, NY: McGraw-Hill, 1981).

16） Greil Marcus, *Dead Elvis: A Chronicle of a Cultural Obsession,*（New York, NY: Doubleday, 1989), 49.（グリール・マーカス／三井徹訳『デッド・エルヴィス』，キネマ旬報社，東京，1996 年，64 頁。）

17） Marcus, *Dead Elvis,* 108.（同書，123 頁。）

18） Marcus, *Dead Elvis,* 108.（同書，123 頁。）

19） Marcus, *Dead Elvis*, 7–8.（同書，22 頁。ただし，原文に従って，訳語を一部改めたところがある。）

20） Bobbie Ann Mason, *Elvis Presley*（New York, NY: Viking Penguin, 2003), 1.

21） Charles Ponce de Leon, *Fortunate Son: The Life of Elvis Presley*（2006), 194.

22） Arizona Memorial Museum Association, “Creating the Memorial,” http://www.arizonamemorial.org/locations/arizona-memorial-creating.html.

23） Erika Doss, *Elvis Culture: Fans, Faith, and Image*（Lawrence, KS: University Press of Kansas, 1999), 107.

24） Doss, *Elvis Culture,* 124.

25） Doss, *Elvis Culture,* 227–8.

26） T. S. Kerrigan, “Elvis Kissed Me,” *River City Journal*, Summer 2002, Vol. 22, Issue 2, 31.

27） Wertheimer, *Elvis at 21*, 21.

28） Alanna Nash, *Baby, Let’s Play House: Elvis Presley and the Women Who Loved Him*（New York, NY: Harper Collins, 2010), xv.

29） Nash, *Baby, Let’s Play House*, 148.

30） John Updike, “Jesus and Elvis,” *River City Journal*, Summer 2002, Vol. 22, Issue 2, 54.

31） Raymond A. Moody, *Elvis Afterlife: Unusual Psychic Experiences Surrounding the Death of a Superstar*（Atlanta, GA: Peachtree Publications, 1987), introduction.

32） Moody, *Elvis Afterlife*, 25–6.

33）Stanley Booth, review quoted in Mary Hancock Hinds, *Infinite Elvis: An Annotated Bibliography,*（Chicago, IL: A Cappella Books, 2000）.

34）Hinds, *Infinite Elvis*, 357. ハインズが参照している論文は：Ruth Pearl Granetz, "The Symbolic Significance of the Elvis Presley Phenomenon to Teen-Age Females: A Study in Hero Worship Through the Media of Popular Singers and Song,"（M. A. thesis, University of Chicago, 1958）.

35）Gary Vikan, "Graceland as *locus sanctus*" in *Elvis*＋Marilyn: 2×Immortal, edited by Geri DePaoli and Wendy McDaris（New York, NY: Rizzoli International Publications, 1994）, 150–170.

36）Nash, *Baby, Let's Play House*, 129.

37）John Dryden, *Alexander's Feast: Or, the Power of Musick*（1736）.

38）Fred Worth and Steve Tamerius, *Elvis: His Life from A to Z*（Chicago, IL: Contemporary Books, 1988）.

39）Joseph Campbell, *Hero With a Thousand Faces*（New York, NY: Pantheon Books, 1949）.

40）Internet Movie Data Base（IMDB）, http://www.imdb.com/name/nm0001211/bio（accessed December 1st, 2016）.

41）Ponce de Leon, *Fortunate Son*, 19.

42）Minor Planet Center, operating at the Smithsonian Astrophysical Observatory, under the auspices of the International Astronomical Union, "（17059）Elvis," http://www.cfa.harvard.edu/iau/special/rocknroll/0017059.html.

43）Robert Penn Warren, *All The King's Men*（New York, NY: Mariner Books, 1996）.

要　旨

時に，歴史的過程は，神話や伝承，そして叙事詩的ストーリーテリングに伝統的に見られる諸サイクルに流れ込む。ジョーゼフ・キャンベルがその先導的著作『千の顔をもつ英雄』のなかで英雄のサイクル ―― 離別，イニシエーション，帰還 ―― を記述するとき，明らかになるのは，イエズス・キリストやアーサー王，そして文学史全体にわたる何万もの，とはいわないまでも，何百もの英雄たちの物語に合致するひとつのパターンである。これらの英雄たちの旅路は，彼らの立身へと通じる数々の試練と闘いの単神話的セットにほかならない。

エルヴィス・プレスリーの社会的上昇，彼のライフスタイルのある意味で夢幻的な物語，彼の早すぎる死，そして，私たちが彼を記念すること，そうしたことすべてが組み合わさって，ジョーゼフ・キャンベルの英雄サイクル理論のパターンを用意する。つまり，実在する人物であるエルヴィスは，生前から，そして死後にも，非実在的で変形力をもつアメリカ的神話になるのである。

世間的人気とは比較的うつろいやすい現象であるのにたいし，エルヴィスのキャリアとその死後のキャリアに伴う反響は，年々大きくなり，けっして衰えを見せない。エルヴィス・プレスリーの顔は，人類史全体のなかで最も認知度の高い人間のイメージである可能性がきわめて高い。

エルヴィスの人気の異例さは，エルヴィスの名声の「いかに」と「なぜ」，そして，21 世紀に入っても変わらぬ彼のイメージの増殖の秘密を，私たちが吟味するよう促さずにはおかない。本稿はまたとくに，死後のエルヴィスの歴史文献学とエルヴィス神話の進化を提示するものである。

キーワード：伝記，エルヴィス文学，ミュージアム，霊的経験，英雄のサイクル

Abstract

Sometimes historical processes feed into cycles traditionally seen in myth, lore, and epic-style storytelling. When Joseph Campbell, in his seminal work *Hero With a Thousand Faces*, describes the cycle of the hero—*separation, initiation,* and *return*—Campbell is describing a pattern that fits the epic cycle of the stories of Jesus Christ, King Arthur, and hundreds, if not tens of thousands, of heroes throughout literary history. The journey of these heroes is the monomythic set of trials and battles that lead to the rise of these heroes.

The ascent of Elvis Presley and the somewhat fantastic tales of his lifestyle, his untimely death, and our memorializing of him all combine to serve the pattern of Joseph Campbell's theory of the cycle of the hero. That is, Elvis, the real man, becomes in his lifetime and after his death, an unreal and transformative American myth.

While celebrity is a relatively ephemeral phenomenon, Elvis's career and his post-mortem career carry a resonance which increase yearly and have never suffered decay. It is quite possible that Elvis Presley's face is the most recognizable human image in the entire history of man.

The unusual nature of Elvis's celebrity prompts us to examine the how and why of Elvis's fame and the proliferation of his image well into the 21st century. This paper will also specifically address the historiography of the post-modern Elvis and the evolution of the Elvis myth.

Keywords : Biography, Elvis Literature, Museum, Spirituality, Heroic Cycle